

'15

前期日程

国語小論文問題

(教育学部)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は六ページです。問題に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合には申し出てください。
3. 解答には黒鉛筆を使用してください。
4. 文字ははっきりと正確に記入してください。
5. 解答は解答用紙(一)(二)の所定の欄に記入してください。
6. 受験番号と氏名を各解答用紙の所定の欄に記入してください。
7. 問題冊子のこのページにも受験番号を記入してください。
8. 退室するときは、解答用紙を(一)(二)の順に重ね、全体を裏返して、机上においてください。
9. 解答用紙を持ち帰ってはいけません。
10. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

受 験 番 号
116

次の文章を読んで、問に答えなさい(なお、出題の都合により、一部表記等を改めた)。

「花は桜」という日本人の発想の根底に無常(滅び)の美学があることは確かである。

うつせみの世にも似たるか花ざくら咲くと見しまにかつ散りにけり

〔はかない人の世にも似ているなあ、桜の花は咲くのを見たと思つたら、同時にもう散ってしまったよ〕

本当に桜の花時は短い。桜は咲いたかと思うと、あっというまに散ってしまう。「花七日」というけれども、本当の見頃はそれよりも短いだろう。それに「花の雨」「花に風」という言い方があるように、桜の花の咲く頃はとかく天候が不安定だ。それだけでなく桜の花の命は短いのに余計な心配までしなければならぬ。

世の中に絶えて桜のなかりせばはるのころはのどけからまし (在原業平)

〔世の中にもしもまつたく桜がなかったならば春は心のどかに過ごせるものを〕

吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりにき (西行)

〔吉野山で桜の枝の梢に花をちらと見た日から気もそぞろになって心は体から離れてしまった〕

人びとは桜前線が近づいて来ると天気予報に一喜一憂する。雨が降りほしくないか、風が吹きほしくないかと気をもむこと頻りである。桜の花はぱつと咲いてぱつと散るからこそ日本人の美意識に強く迫ってくるのではないか。桜の花ははかないからこそ日本人の心の琴線に触れるのではないか。桜の花がいつまでもしぶとく咲き続ける花——たとえば椿のように——だったら、おそらく国民的人気を勝ち得ることができたかどうか、大いに疑問である。古来、日本人は雪のように霏々として散り急

ぐ桜花に清浄な美しさを感じたのである。

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにかひさしかるべき

〔散るからこそ桜はとても素晴らしいものなのだ、このつらい世の中になにか永く続くものがあるのか〕

ほかの花に比べて桜は散りぎわが実にいさぎよい。見苦しい姿を人目にさらすことがない。「往生際が悪い」という言葉に端的に示されているように日本人は身の退き時を大切にす国民だ。老醜をさらし体力の限界まである地位や職にしがみつくのを見苦しいと感じる。余力を残して後進に道を譲るのをいさぎよしとする。桜の花の散りぎわのよさは日本人のモラルにもよくなっているわけである。

桜花への愛着からも推し量られるように、日本人の美意識には瞬間的なもの、滅びゆくものへの嗜好しこうが確かにあるようだ。言い換えれば日本人は無常なものに美を見いだすということだ。しかしよく考えてみると、これは実に驚くべき美意識だ。日本人自身はこのことの特異性について気づいてはいないようだが、少なくとも西洋の物差しではかってみるとこの美意識は深い謎である。

西洋の人びとは永遠のもの、無限のもの、不変のものに美を見いだす。また永遠のもの、無限のもの、不変のものを創り出すことこそが美の創出だと信じている。だからこそ西洋の芸術家たちは時の経過とともに朽ち果てる木ではなくて、時の風雪にも十分耐えられる堅牢けんろうな石を素材に選んで像を刻んだり、神殿を建立したりしてきた。要するに、西洋には「恒常の美学」が厳然として存在する。

次にかかげるフランス・ロマン派の詩人テオフィル・ゴーチエ（一八一一〜七二年）の詩句は芸術至上主義的色彩に染められているけれども、西洋的美意識をよく体現している。

すべては滅びる。——ただ堅牢な
芸術だけは永遠。

胸像は

都市が消え去ったあとに残る。

そして一人の百姓が

土の下に見いだすことになる

いかめしい賞牌しょうはいは

一人の皇帝を明るみ出す。

神々も死すべき定め。

だが至高の詩句は

とどまる、

青銅よりも強く。

彫れ、磨け、刻め。

なんじの漂う夢が

強韌きやうじんな石の塊くわいに

封じ込められんことを！

(〔芸術〕)

見られるとおりゴーチエの芸術至上主義の前提には無常の認識がある。ヨーロッパ人も無常を感じないわけではない。しかし西洋的な無常観は、実は日本的な無常観とは似て非なるものだ。なぜならばゴーチエは世の無常を嘆きながらも無常の世に對して「常なるもの」(芸術)を對置しているからだ。ゴーチエは物質的世界のはかなさの彼方に芸術の不滅性を高くかかげている。

ゴーチエの例からも分かるように、ヨーロッパの人びとは恒常的なものを求め、そこに美を、素晴らしさを見いだす。だから、無常にプラスの価値を付与し、そこに美を認めることは普通にはありえないことだ。西洋の人なら美しいバラの花を一日でも永く愛でたいと思うだろう。そうして、その思いが高じれば花時の永い品種を開発しようと努めるだろう。あるいはドライフラワーにしてバラの花の美しさを人工的に保存することを考えるだろう。西洋人にとって「持続」はプラスの価値をもつ。こうした彼^{ひが}の美意識の懸隔はその歴史意識にも表れている。日本人は歴史を川の流れにたとえる。この喩えを日本人はごく当たり前のこととして受けとめているけれども、実をいえばこれはそんなに普遍的な発想ではないのだ。このことに触れて古代ギリシア史の大家、藤縄謙三は次のように指摘する。

日本人が歴史を川の流れに喩えるのに対して、西洋人は歴史を何か構造物のようなものと見ているようである。(「……」)そして、もしも歴史が人間の努力によって作られて来たものだとなれば、それは決して流れのようなものではなく、何かに喩えるとすれば、ピラミッドのごとき構造物だということになるであろう。(『ギリシア文化と日本文化』)

重要な指摘である。ピラミッドの代わりに大聖堂のような建築物をイメージしてもよいだろう。西洋の人びとは数百年をかけて営々とゴチック式教会の大伽藍を築き上げてきた。

こうした西洋の人びとの粘着性は、せっかちで、忘れっぽく、新しがり屋の日本人には理解しがたいだろう。持続性に対する西洋の人びとの思い入れは驚くほどだ。恒常の美学は「常なるもの」への憧憬の別表現にはかならない。そして「常なるもの」にこだわるか、こだわらないかによって、世界観は大きく変わってくる。

(野内良三『偶然を生きる思想「日本の情」と「西洋の理」』日本放送出版協会)

問 「日本人の美意識」と「西洋人の美意識」に関する筆者の見解に対し、古典文学作品を具体的に例示しながら、あなた自身の意見を述べなさい。(八〇〇字以内)

以下のマンガと文章をふまえて、問に答えなさい。

アザガキ君

東海林さだお

(13153)



(毎日新聞二〇一三年三月二九日)

右のマンガでは、外来語の使用でトラブルが起こっているが、現代日本語の外来語について、次のような指摘もある。

先に見たように、最近の語彙調査では、高頻度・広範囲に使用される語群(基本語彙)の中に数多くの外来語を見出すことができる。そこには、生活の近代化という言語外的な条件によってその使用が増え、基本語化したと考えられる「エンジン」「スキー」「ホテル」「テレビ」「ビル」などの具体名詞のほかに、「タイプ」「システム」「バランス」「ケース」「トラブル」のような抽象的な意味を表す名詞が少なからず認められる。たとえば、「トラブル」という外来語の次のような使用は、現在の新聞では、ごく普通のものになっている(個人名はイニシャルに変更)。

(一) 調べでは、A容疑者らは女性関係の「トラブル」から先月二九日午前二時ごろ、Bさんら少年二人を公園に連れ出して暴行、Bさんの足元にライターで火をつけた疑い。
〔毎日新聞二〇〇〇年七月九日朝刊社会面〕

ただ、ここで「トラブル」が表している意味は、生活の近代化に伴って新たに生じた意味とはいえないし、また、「アイデンティティ」や「セクハラ」などのように、それ以前に日本人に自覚・共感されていなかった概念でもない。実際、ほぼ半世紀前の新聞記事では、これと同様のことがらを次のように表すことが一般的であったと考えられる。

(二) W助教授の事件につき本富士署の捜査本部では、一六日五時五〇分警視庁R捜査一課長から正式に「事件はHの犯行でありその動機は金と女のもつれから」と発表。
〔毎日新聞一九五〇年一月一七日〕

このことは、「トラブル」が、この半世紀の間に、それまで使われていた「もつれ」などの類義語に代わって使われるようになった可能性を示すものである。

(金愛蘭(二〇一二)「外来語の基本語化」『外来語研究の新展開』おうふう)

問 日常生活で外来語を使う際には、どのような配慮や工夫が必要か、具体的に述べなさい。(六〇〇字以内)